



NPO법인
삼천리철도

NEWS LETTER

三千里

Vol. 27

2019年8月号

発行
NPO法人 三千里鐵道
〒441-0109
愛知県豊橋市下五井町青木31
TEL.0532-53-6999
FAX.0532-54-4931

真の友好のために

韓日関係の摩擦が具体的な形で表面化してきた。徴用工裁判の結果を巡って日本政府は経済制裁をかけようとしている。8月初旬に実行段階に入るといふから、実行したにしても中止したにしても、振り上げた拳のゆく末が気になる。

韓日関係のこじれは、この徴用工問題が端を發したわけではない。その根本は歴史問題である。16世紀末の豊臣秀吉の朝鮮侵略まで遡らなくても、明治以降の日本の姿にこそ現在の問題がある。

その姿は1945年の日本の敗戦で一つの結果を出したことには間違いないが、あの戦争と東北アジアの侵略に対し「総括」したという話は一切聞いていない。日本敗戦から75年という年月を経過した今でも。

私事になるが、小学3年まで通った朝鮮学校が強制閉鎖され、4年生から日本学校に編入されるのだが、授業を中断して東海道本線の線路わきまで連れていかれ、天皇が乗った「お召列車」を何度か見送った記憶がある。時代を振り返れば朝鮮戦争の真ただ中であつた。日本の敗戦から10年も経っていない時期に、授業を中断して小学生まで動員して列車の天皇を見送る行動は、現在の日本のありようとぴったりと一致する。当時は、革新政党マスコミも、今よりずっと元気がよかったと記憶しているが、やはりそれぞれがその限界を抱えながらの日本社会だったのか。

徴用工問題に話を戻そう。

中国人徴用工と日本企業とは和解が成立している。

周恩来は日本に日本の侵略に対する賠償は放棄した。しかしながら、西松建設、鹿島建設、三菱マテリアルなどの日本企業は、中国人徴用工に対する個人補償には応じている。

いったいこの落差は何なのか。

日本政府は1965年の韓日条約で解決済みだと声高に言っているが、条約締結後の日本政府の高官の発言からもこれは無理である。“無理が通れば道理が引込まむ”の諺どおり、理にかなっていないことは明白である。



代表 都相太

この国で生まれ80年近くの齢を重ねてきたが、“従軍慰安婦問題”も含め解決する機会は無数にあった。なぜできなかったか。

やはり明治以降の、侵略、植民地政策、おびただし殺りくと敗戦につながったリングを、日本及び日本人が断絶できなかったことにあろう。

温厚で、まじめで、物静かな大多数の日本人の中から、ヘイトスピーチをまき散らす者や、歴史的事実すらも否定する者たちが表面に出るようになった。

私は、日本がどんどん壊れていくと言っている。

目標のない社会はどこへ向かうのかははっきりしている。

三千里鐵道は、設立以来から“和而不同”の心構えからスタートしている。

“和”である前提条件は、一切の戦争は否定する、朝鮮半島の平和と統一をめざす、日本を含め東北アジアの平和を構築する、などの理念である。その前提があれば、違った意見は尊重し、ともに歩むことはできると確信している。

たかが板門店、されど板門店!

三千里鉄道顧問 康宗憲

2019年6月30日、文在寅・金正恩・トランプの三国首脳は板門店で会同した。そして朝米の両首脳は、板門店の南側地域で三回目の首脳会談を開き、53分間にわたり意見を交換した。シンガポールで38分間、ハノイでは35分間の単独会談だったのに比べ、かなり踏み込んだ協議をしたようだ。会談後の記者会見でトランプ大統領は「2~3週間以内に実務交渉が再開される」と述べており、朝鮮が公開した記録映画でも「朝鮮半島の非核化と朝米関係の新たな突破口を開くために、生産的な対話を積極推進することで合意した」と解説している。

7月27日は、朝鮮戦争の停戦協定が板門店で締結されて66年になる日だ。板門店は「戦争と分断」を象徴する場所である。その板門店が今、「平和と統一」の未来を予告する場所になろうとしている。朝米交渉の行方を展望し、その可能性を探ってみたい。

🌀なぜ終戦を宣言できないのか

朝鮮戦争は停戦協定によって休戦状態に入った。停戦協定の機能は「朝鮮半島問題が平和的に解決されるまで、相互の敵対行為と武装行動の完全停止を保障する」ことである。しかしこの機能はすでに有名無実化している。軍事停戦委員会と中立国監視委員会も解体されて久しい。停戦協定に署名した当事国間の関係が、根本的に変化したからだ。

米中の修好は敵対関係の解消を意味し、貿易摩擦を抱えつつも今や経済面では協力関係に発展している。韓中も国交を樹立し、韓国経済はもはや中国との交易を抜きにしては成立しない状況になった。一方、米日との関係正常化を目指した朝鮮の外交努力は挫折する。米ソ冷戦の終息は朝鮮半島に、平和ではなく非対称的な対立構図をもたらした。朝米敵対関係の深化と、窮地に立った朝鮮の核・ミサイル開発である。

昨年4月の板門店宣言と9月の平壤宣言で、南北の

両首脳は「半島全域における戦争脅威の除去と敵対関係の解消」に合意することで、事実上の終戦と不可侵を宣言した。しかし南北の合意は、停戦協定に国連軍の名で署名した米国の同意がなければ無意味である。トランプ政権は「北朝鮮の核放棄先行」が終戦宣言・平和協定の前提であるとの立場を固守している。停戦協定の締結当時にはなかった“北朝鮮の核脅威”除去が、朝鮮半島平和への重要課題であることは言うまでもない。だが、米国の本心は、終戦宣言・平和協定がもたらす画期的な変化への恐れであろう。「朝鮮半島の危機」を煽ることで米政府は日韓との従属的な軍事同盟を維持し、膨大な武器購入を強要してきた。加えて、中国包囲網の形成を主眼とするインド・太平洋戦略の構築にも、「朝鮮半島の危機」は不可欠の要素だった。東アジアにおける米国の既得権は、朝鮮戦争の停戦体制を維持することで守られてきたのだ。

🌀米大統領の「板門店越え」と朝米交渉の展望

板門店の軍事境界線で金正恩委員長と握手したトランプ大統領は、警護チームの同行なしに通訳だけを連れて北側地域を歩行した。「敵国領土に入った初めての米大統領」を演じた彼は、間違いなくその日の主役だった。文在寅大統領はこの場面を指して「事実上の朝米終戦」と評している。だが、その一方で「具体的な成果はなく、トランプのパフォーマンスに南北が脇役を務めただけ」との冷笑的な反応もある。確かに今も、非核化の先行要求と制裁維持という米政府の姿勢に変化はない。「たかが板門店」なのか？しかし分断民族の一人として、筆者は「されど板門店！」の想いを抑えがたい。北側地域で握手する朝米首脳の姿は、戦争の終結と敵対関係の解消が遠い日ではないことを示唆している。

朝米交渉の行方を展望するには、昨年6月のシンガ



ポール会談と今年2月のハノイ会談を総括すべきだろう。シンガポール共同声明の前文には「トランプ大統領は朝鮮に安全の保障を与えることを約束し、金正恩委員長は朝鮮半島の完全非核化への確固で揺るぎない約束を再確認した」と明記されている。安全保障と非核化を並行して推進するという両首脳の間で約束された。ハノイ会談が決裂したのは、米政府がこの約束を破棄し「核を含む大量破壊兵器の先行廃棄」を要求したからだ。リビア方式への回帰である。よって、今後の交渉が進展するためには、米政府がリビアではなくシンガポールに回帰する必要がある。安全保障と完全非核化の並行推進・互換である。

その点で、最近の米政府と連邦議会には注目すべき変化が見られる。板門店会談後にポンペオ国務長官が「北朝鮮の望む安全保障を確実なものにすべきだ」という発言をくり返している。また、ビーガン朝鮮政策特別代表が「大量破壊兵器の凍結、非核化の最終状態に関する定義、核兵器放棄に向けた工程表に合意する」という目標を提示した。さらに下院は7月11日、来年度の国防予算案に「朝鮮戦争の公式終戦を促す」決議条項を盛り込んでいる。

連邦議会でようやく始まった、朝鮮戦争の終戦宣言と平和協定締結への動きを注視したい。そして、国務省が「大量破壊兵器の凍結は非核化の“入り口”に過ぎない」と解説したことは、“出口”を前提としているだけに、合意内容の「段階的な履行」を要求する朝鮮の立場に近接するものだ。今後の実務交渉で米国が、終戦宣言、連絡事務所の開設、韓米連合軍事演習の完全中断、民需関連部門の制裁緩和などを提示し、朝鮮が、寧辺核施設の完全廃棄、その査察検証、他地域核施設の追加廃棄を提示すれば、一定の合意に至る可能性はあるだろう。

ただし、米政府が制裁維持の姿勢を堅持していることから、交渉の前途は楽観できない。制裁は敵対政策の具体的な表現であり、「信頼構築を通じた非核化の推進」というシンガポール声明に逆行するものだ。文在寅政権にとって緊急の課題は、米政府への付度をやめ、本来は経済制裁の対象ではなかった開城公団と金剛山観光の再開を、速やかに決断することである。そうしてこそ、第4回南北首脳会談の開催に向けた動力を確保できるからだ。

第三次朝米首脳会談、史上初の南北米首脳会合、 電撃的に開催される!!

2019年6月30日、この日の喜びは言葉で言い尽くせない。

昨年6月12日の史上初の朝米首脳会談の時の歓喜が、2月末にハノイで持たれた第二次朝米首脳会談が予想を完全に裏切る形で物別れに終わったことで不安に変わっていたからに他ならない。とりわけ安倍首相や日本のマスメディアの冷笑的態度に打ちのめされていたからこそ、朝米対話の復活が本当にうれしかった。

文在寅が、G20で訪日するトランプに対して、G20後の訪韓を要請した時には、朝鮮日報が「物乞い」外交だときき下ろしていたが、実はこの時にすでにこの板門店会談の準備がスタートしたのだとわかる。

そしてそれが実現すると決まった6月に入ってから金正恩とトランプの親書交換である。直前までどういう形で進めるかは決まっていなかったであろうことは、当日のあたふたぶりから推察されるが、トランプのツイッターは、この会談の価値を上げるための演出だったということだろう。

国連軍は米国に指揮権が委任され、在韓米軍司令官が国連軍司令官を兼任している。つまり米大統領こそ事実上の国連軍最高司令官である。そのトランプ大統領が、停戦ラインの板門店を自ら訪れただけでなく、朝鮮民主主義人民共和国の最高司令官と手を携えて北側に越境した。これは朝鮮戦争終戦の意志を象徴的に表したものといえよう。



「100年行動」はこんな活動をしています

磯貝治良

略称「100年行動」とは「『韓国併合100年』東海行動」のことです。

日本による朝鮮植民地侵略が決定的になった「併合条約」から100年に当たる2010年春、9つの団体と50名ほどの個人の賛同を得て発足しました。実行委員会形式で活動しています。結成集会の記念講演は、現在三千里鐵道の顧問である康宗憲さんでした。発足の年1年間にはさまざまな活動を展開しました。街頭情宣、映画上映会、平和戦争展や集会での写真展示、シンポジウムや講演集会など。

発足から10年、毎年3・1独立運動と日朝平壤宣言の9月を期して、日本と朝鮮半島の歴史／記憶の蘇生、現在の状況に関わる「生きなおし／責任の取りなおし」を模索する行動をつづけています。日本と朝鮮半島の関係、東アジアの政治状況は矛盾に充ちて不安定なため、良きにつけ悪きにつけ、わたしたちの行動課題は消えることがありません。それでも10年つづけていると、その様式／手法がマンネリ化しかねません。革命は絶えず革命されなくてはならないように、大衆運動／市民運動も絶えず刷新されなくてはならない。ことばで言うほど容易でないとしても、その問いを失っては、運動が紋切り型になる、実力を削がれる。運動にかぎらず、何につけても自己批評を失ったら墮落する。「100年行動」はだいじょうぶか？ 老齡のアタマでそんなことを思っている矢先の朝鮮3・1独立運動100周年。

頼もしいことに「100年行動」の活動に刷新と広がりが見えはじめています。

皮切りは昨2018年9月の「日朝ピョンヤン宣言」16周年にまつわる行動。集会「なくそう偏見 つくろう信頼・友好 今こそ日朝国交回復を！」を和田春樹さんの講演をメインに開いて、名古屋榮周辺をデモ情宣。11月、「平和の少女像」によって旧日本軍性奴隷被害者ハルモニの訴えを世界に広めている彫



刻家夫妻を韓国から招いて集い開催（只今もキャンペーン中）。

本番の今年は3月2日に集会「三・一独立運動から百年 日本は南北朝鮮とどう向き合うべきか」を徐京植さんの講演と自前の文化表現マダンのコラボで開催。徐京植さんもデモスタイルで先頭を歩いて榮行進。さらに5月には韓国への「3・1独立運動100年」ツアーを実施。30名近い人が日本の植民地史跡などを訪ねて学び、韓式料理を満喫したようです。

何が活動を刷新、広げているかと言えば、実行委員会にあたらしい人が加わって精力的に新機軸を立て、外にむけて動き、集会の形式ひとつにも息づかいが感じられるよう工夫していることです。運動は人が創る。あたりまえのことながら、「100年行動」のここ1年の活動がそれをつくづく証明しています。それぞれがどんな思いと課題を担って活動しているか。その魅力を紹介したい人ばかりですが紙数がないので、「三千里ニュース」なので当会事務局長・韓基徳さんの着想と実行力、ポテンシャルを挙げさせてもらいます。

「100年行動」の代表は筆者ということになっていますが、近頃は会議出席も怠りぎみで、主催者挨拶係に墮しています。

東海北部線連結募金伝達ツアーに参加させていただきました。

西村 寿美子

2018年12月の東海北部線連結募金伝達ツアーに参加させていただきました。ツアーの参加は7月の丁世絃さん講演集会に参加した時にほぼ決めていました。この時、参加者から統一の方法や不安など具体的に変わったからこそ出てくる質問が続き、統一の実感が湧いてきました。そして東海北部線を繋ぐ事業にもワクワクしてきました。植民地時代に鉄道は侵略の象徴でした。土地を奪い、人々の仕事を奪い、農産物などを収奪し運ぶ手段でした。その鉄道が、あまりにも長い分断から人々が行き交う道になれるのは嬉しいことです。

12月7日の伝達会場には「함께 꿈꾸면 열차는 다시 출발할 수 있습니다」とパリから釜山を経て平壤までの列車の時刻表まで掲載され、ユーラシア大陸横断の期待が高まります。都相太代表は「在外同胞として平和と統一のためにできることをしていく」と挨拶されましたが、日本人として、安倍政権が「解決済み」とする植民地支配責任を問うていかなければと改めて思います。

翌日は李時雨さんのガイドで江華島のフィールドワークでした。展望台から見るイムジン河は分断させる悲しい川ではなく、泳いで渡れ、自然の恩恵をもたらす平和な川に見えました。これからもスナリとはいかないかもしれないけれど、みんなが願ってきたことが現実として見えてきたので、目的地ま



で頑張っていきましょう。

日本軍性奴隷制被害者の金福童ハルモニと吉元玉ハルモニは日本に来ると朝鮮学校を訪問され子どもたちを励ましてこられました。金福童ハルモニは晩年には「金福童の希望」という韓国、朝鮮学校の奨学金制度を立ち上げ、統一運動を次世代に託されました。吉元玉ハルモニはその思いを引き継いで活動しておられます。

吉元玉ハルモニの故郷は平壤です。戦争が終わっても故郷に帰れず、98年に申告するまで被害を押し隠して暮らしてこられました。今も解放されていないというハルモニですが、日本政府の謝罪を受け、列車に乗って自由に故郷に帰れる日が来るのが私の願いです。

朝鮮と日本を行き来する 万景峰号いまどこに

会員 平澤 英昭

何をここまで制裁仕打ちをするのか日本。日本は、過去の朝鮮半島の歴史を曲げてはいけません。修正と言う言葉をもって、歴史を変えようとしています。ある歴史学者の本を読んで学びたいと思います。(修正学者でない)

征韓論からはじまって、朝鮮侵略政策で経済的要求から強められていく。そして、日清戦争から日露戦争へと朝鮮を植民地化し、そして、朝鮮併合へ、満州を植民地化していく。その行く先は、1945年の敗戦です。この歴史の事実をしっかりと見据えます。

これらは、断片的に引用しましたが、これらの事実の歴史に異議を唱える人たちがいると思慮します。私は、その記述された文章は読んでいませんので、その異議を唱える側の人たちからも学ばなくてはなりません。

でも、どう考えても、全部否定できるでしょうか。その否定できない歴史が、公に出版されているのです。私は、その本の存在も、当時のベストセラーから知っています。

最初の私の思いは、ここが原点にあります。なぜ、

日本は歴史を直視しようとしませんか。現在の朝鮮半島の置かれた状況です。南と、北と分断されています。もとよりこの事実は、日本も関係しているのではないのでしょうか。私は、このことについては、歴史を学んでいく必要があります。

万景峰号が朝鮮と日本を行き来しているときは、うれしく、いっそうその船に乗って行きたい。とあこがれていましたが、いつのまに行き来ができなくなりました。私の第二のふるさと朝鮮への郷愁が途絶えました。そのような時、三千里鉄道の存在が、私はうれしくなりました。そして、いつしか会員として迎えていただきました。

私が、なぜ朝鮮について親近感を感じるのでしょうか。一つ、父が、植民地下の北朝鮮で仕事して、私たち家族の生活は安心生活できた、感謝の思い。二つ、私の仕事は土木で、最初の勤務地は、天竜川右岸側懸崖地形急峻なところ、道なき道を、山をダイナマイトで爆破し、山を切り崩し、道幅を確保して道をつくっていく。その現場で、事故が発生し、朝鮮の方が亡くなり、家族の方が、天竜川に船を浮かべて、荘重なる儀式を行い、亡くなられた方への思いを川面に寄せました。そのあと、係長といっしょに葬儀に参列しました。その後、朝鮮の方たちの日本での生き方を、書物から知ろうと、「最下層の人々」「日本残酷



物語」「部落」等々読んでいくうちに、朝鮮、そして朝鮮の方たちへの親近感を感じるようになりました。

そして、最近は、「日本の歴史」下、「朝鮮史」「近代日本は韓国をどのように併呑したか？」等を読んでいきます。

現在の朝鮮への思いは、朝鮮半島が一番大切な国で、その国の政治支配形式は尊重。歴史を直視。対話外交。障壁はつukらない。多文化共生。万景峰号は平和へのかけはし。

三千里鐵道もまさに平和へのかけはし。これからも、朝鮮について未知多い私ですが、三千里鉄道の仲間から、いろいろな話し合いの中で学んでいきます。よろしく願います。

朝鮮戦争の終結宣言、 まずはそこからだ!!

韓基徳

昨年の7月14日に、6.15共同声明18周年記念集会は、丁世鉉元統一部長官を迎えて、「平和、新しい始まり」と題した講演会を開催しました。

生涯忘れられない日となった4.27第三次南北首脳会談と、直前まで開催が危ぶまれた中で開催された6.12朝米首脳会談を歓迎しての中、世界中で講演に飛び回っていた丁世鉉元長官を迎えての講演会が開催できたのは、三千里鐵道ならではの事でした。

丁世鉉元長官は、4.27板門店宣言と、6.12朝米首脳共同合意文の内容とその成果について説明しながら、朝鮮半島の平和が必ずやってくると語られました。

朝鮮半島の非核化を推進する過程で、朝鮮戦争の停戦協定を平和協定に代えて、朝鮮民主主義人民共和国と米国・日本が国交を結ぶことなしに、朝鮮半島ひいては東アジアに平和は訪れません。今まさに

平和の大道が開かれる、そのような歴史の転換点を私たちは目撃しているのだと強く感じさせられた講演会でした。この集会には多くのニューカマーも参加され、講演会の後の懇親会では、丁世鉉元長官を囲んで質問攻めにしていました。



南北が、私たちが！ 力を合わせて！ 平和で豊かな 朝鮮半島を作ろう！！

白康喜

去る4月21日(日)、名古屋市博物館地下講堂にて、6・15共同宣言十九周年/4・27板門店宣言一周年記念企画として、「南北が、私たちが力を合わせて/平和で豊かな朝鮮半島を作ろう」が開催されました。とりわけ、4・27板門店宣言が発表されてから一周年を祝うことと同時に、この一年の朝鮮半島を取り巻く情勢の流れを振り返りながら、次なる展望に向けて私たちは何をすべきなのかを考える機会とするイベントとなりました。

この日の前半は、昨年の歴史的な出会いの感動を全身で共有すべく「文化公演」を開催しました。オープニングを飾ったのは、韓国伝統音楽グループ「ノリパン」による民族打楽器の演奏。チャングの響きが会場全体を盛り上げていきました。演奏者の中には小さな子どもも参加しており、幼い手つきで力強く演奏する姿がとても印象的でした。

その後、「在日本朝鮮文学芸術家同盟 東海支部」の皆さんによるノレ(歌)とチュム(踊り)の披露。美しい歌声と舞い、特にチュムでは腕につけた鈴の音と舞踊が非常に美しかったです。

そしてトリを飾ったのは、重要無形文化財第5号パンソリ唱者「安聖民」さん。身体の奥に響く独特の歌声が、一瞬にして会場全体をパンソリの世界へ。客席との掛け合いなどもあり、会場全体が「ひとつ」になった大変素晴らしい公演でした。

後半は都相太理事長による主催者あいさつで始まりました。

あいさつの中で「19年前に三千里鐵道を立ち上げたが、我々の団体は、南北の鐵道が行ったり来たりできるようなれば、その役割を終える。早くその役

割を終える日が来るように、これからも皆さんと共に歩んでいきたい」と述べました。

その後、朝鮮大学校准教授、李柄輝先生の講演。

この間、日本のメディアにも度々ご出演になっている李先生。今回の講演では「朝米関係の現況」と題し、歴史的に見た朝鮮半島の停戦体制、そしてそこにある東アジアの冷戦構造、朝米間でのこの間の動向、今後の展望などをお話し頂きました。

その後、韓国問題研究所 所長であり当会顧問でもある康宗憲先生による講演では、「南北関係の現況」と題し、朝鮮民族にとっての米国という存在、南北首脳会談の成果、民族自主による平和・繁栄・統一、韓日・韓米の歴史的視点など、多岐にわたり講演して頂きました。

その後、講演をされたお二人の先生による対談では、お二方が、南北の首脳陣、そして朝鮮半島を取り巻く周辺国首脳陣に「助言・進言できる立場だったら、何を伝えたいか」というテーマでお話し頂きました。非常にユニークな対談形式でのお話でしたが、聴いている私たちにとっては、現状の問題点・課題点が明確になり、大変分かりやすい対談講演でした。

こちらの講演・対談の内容は、ブックレットとして三千里鐵道より販売される予定です。非常に内容も厚く、様々な視点から朝鮮半島情勢が整理された内容になっておりますので、講演の詳細内容につきましては、ぜひこちらを読んで頂けたらと思います。

